

金融資産 形成術



“分散投資を 考える”

第2回

合同会社フィンウェル研究所 代表 野尻 哲史

「卵の格言」は受精卵でなければ

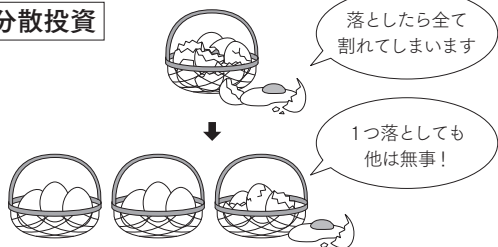
資産運用を考える時に、リスクを軽減する方法の一つとしてよく言われるのが、分散投資です。でも十分に理解しているでしょうか。

分散投資を説明するためによく使われるのが、「卵は1つの籠に盛るな」という格言です。しかし、これもあまり正確に伝わっていないのではないかと思います。「9個の卵を1つの籠に入れていて、万一落としてしまったら全て割れてしまう。でも3つの籠に分けておけば、万一、1つを落としても残り6個は無事です」といった説明をしていませんか。

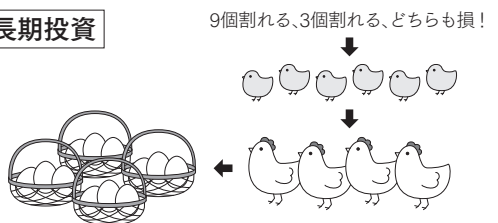
これは本当に十分な説明になっているでしょ

【図表】卵は1つの籠に盛るな

分散投資



長期投資



出所：筆者作成

うか。投資で考えると、9個割れても3個割れても、損は損です。なぜ3個割れるのがいいのか、これでは十分に伝わらないと思います。

しかし、残った卵のその後のストーリーがあれば、どうでしょう。割れなかった6個の卵が将来、ひなにかえって、親鳥になり、また卵を産むというプロセスがあれば、残った卵が利益を生み出すこととなります。すなわち分散投資は第1回で説明した長期投資と組み合わせることで初めて本当の力を発揮することが分かります。

そうなる卵の格言では、「将来、ひなにかえって親鳥になる」という卵そのものも大切な意味を持っていることが分かります。カステラなどの卵製品ではダメですし、受精卵でなければいけません。また冷蔵庫で保管していてもいけません。運用で言えば、「収益を生むもの」でなければいけないのです。

資産クラスで分散投資を言う場合には、株式と債券とか、個別株ではグロース株とディフェンシブ株、国内株と海外株といった組み合わせが分散投資の例示としてよく使われます。それぞれの価格の動きが似ているかどうかを示す相関係数が低いほど、すなわち動きが似ていないほど分散の効果は高いといわれています。

しかし、もう一つ、価格そのものが共に上昇する潜在力を持つことも大切なのです。すなわちひなにかえる卵でなければなりません。

勤務先と資産運用先が一緒だった

ところで、「給料の源泉と運用先の分散」を考えたことはありますか。分散投資は大切だと分かっている、単に株式と債券の話だけではお金と向き合う場合には不十分です。これを生活の中にまで入れて考えることも大切です。

1997年は私にとっては大波乱の年でした。当時の私の勤め先、山一証券が自主廃業をした年で、住宅ローンを抱えながらの解雇という事態は、第1回の長期投資の中でも言及しました。そのこと自体は大変なことではあったのですが、今思えば大きな教訓でもあります。「給料の源泉である勤務先と資産の運用先である会社が分散されていなかった」ということです。

今、注目されている積立投資を1982年の入社当時からやっていましたが、山一証券株を買う「自社株買い」だったのです。会社が自主廃業するとともに、給料の源泉である山一証券と、資産の運用先である山一証券株の両方を失ったのです。これは、分散投資の欠如にほかなりません。

ライフサイクル仮説では、個人が一生涯に消費できる「所得の総額」の現在価値を想定して、消費行動を行うという考え方を前提にしています。若い時代には消費を上回る所得を稼ぎ、その余剰を資産形成に回す。高齢になってからはその資産を取り崩して消費に回すといった行動を説明する理論です。

この前提には、生涯所得を稼ぐ、人的資産の前提があります。人的資産を現金化するプロセスが勤労だとすると、働く会社とそこから生まれた金融資産を運用する先が同じであることは、人的資産と金融資産が分散されていないこととなります。意外に危険なことです。

もちろん自社株買いを否定するつもりはありません。一般に自社株買いは手数料がかからなかったり、補助金があったりと、資産形成には大きな力になりますので、これを使わない手はありません。ただ、これだけに頼ることはリスクを軽減できていないということです。他の金融資産も同時に保有することを考えるべきです。

あなたにとって財産とは

「あなたにとって財産って何ですか」と聞くと、「それはやっぱり家族だ」と答える方がいます。うれしいことです。私も子どもは3人いて、全員社会人になっていますが、家族は本当に大切な財産だと思っています。

ではその財産は分散されていますか。こんな聞き方は不謹慎かもしれませんが。しかし住んでいるところ、職業、習得している技術・ノウハウ、使える言葉などが分散されているといいかもしれません。地震が起きた時に助け合えるた

めには一緒に住んでいない方がいいかもしれません。業界の浮沈はいつの時代にもあることですから、万一の時には違う業界の方が助け合えるかもしれません。

私は今、夫婦2人の生活ですが、わが家の子どもたちは全員社会人になって、バラバラに住んでいます。子どもたちの仕事は、金融とは一切関係のない業界で、それぞれ独立して生計を立てています。その意味で、分散されています。

もちろん、自分が若い時にできていたわけではありません。家族と一緒に住むことは普通ですし、私の転勤で家族一緒にニュージャージーに移り住んだこともあります。また、子どもが小さいうちは親の金銭的負担も大きいので、とても分散されていません。いや、集中しているというべきでしょう。その学費を子どもに負担させるという分散もありますが、子どもにとっては卒業してから負債を抱えて社会人生活を始めるわけで、決して得策ではありません。

その意味で、この年齢になってやっと家族という財産を客観的にみられるようになっていくのかもしれません。

退職後のために時間も分散

資産分散という考え方を、投資だけではなく、もっと広い視点で考えてみると、さらに大切な資産があることに気が付きます。それは、時間です。

退職に向けて資産をつくり上げるという話をすると、「退職後の生活を楽しむのはお金だけじゃない」と反論されることがあります。そう、楽しみの部分をつくり上げるために、現役時代のどこかの時点から自分の大切な時間を分散させて、楽しみにのめり込んでおくことも必要なかもしれません。

残念ながら私は、この点だけは分散投資ができていません。定年になっても時間の配分は100%仕事にとどまっています。

のじり さとし 1959年生まれ。大学卒業後、内外の証券会社調査部を経て2007年よりフィデリティ退職・投資教育研究所所長。2019年5月から個人の立場でも情報発信を開始。データを基に消費者のお金との向き合い方に関する提言を行い、啓発活動を行う。日本証券アナリスト協会検定会員、日本FP学会、行動経済学会などの会員。著書には「定年後のお金」（講談社+α新書）、「脱老後難民 英国流資産形成アイデアに学ぶ」（日本経済新聞出版社）など多数。